

鹿 10 十二歳の初狩り = = = 猪・鹿・狸より



鳳来寺山行者越の一つ家に、五十幾年の狩人生活を送って、名代のがむしゃら者などと言われた丸山某は現に生きている。行者越は鳳来寺の裏道で、以前は鳳来寺から遠江の秋葉山への道者路に当たっていた。昔役の小角が開いたと言う伝説の地で、あるいは小角がここより登ること能わず、引き返した跡とも言うて、別に行者返りの名もあった。鳳来寺へ一里、麓の湯谷(ゆや)へ一里、文字通りの一つ家であった。会って話している間にも、昔の狩人はこうもあろうかと思われるほど、一本気の気儘さがあった。而して何物の力をも信じない冷酷さが、言葉の端々まで感じられた。話の中でも、てんでこっちの言うことなど耳にいれていない様子で、言いたい放題を甲高い声で喋っていた。生まれたのはさらに山奥の、北設楽郡黒川在で、今の家へは養子だそうである。

生家も代々狩人だったそうである。当人が狩りの最初は、一二の年の秋、焼畑の傍で撃った鹿だった。初めの丸は尻に中って惜しくも急所を外れたが、続いて遁げる鹿を追ってゆくと、遥かのタワで犬が止めていた。そこで泡吹きの大木に身を凭せて、第二発を送ると、鹿は谷に向けて転がり落ちたそうである。すぐ後を探し求めて、藤蔓を取って横に背負い上げたが、重いのと谷が険しくて、上がることが出来ない。仕方ないので、鹿には上衣を脱いで掛け、自身は谷を上がって帰って来た。そして遥かにわが家を望む処まで来て、立木に上っ

て枝を叩いて合図をしたと言う。そのおり家で下男同様に使っていた、乞食とも何ともつかぬ男があって、それが迎えに来てくれて運んだ。一六貫七〇〇目あったそうである。その鹿をさらに五里隔たった津具（つぐ）村の鹿買いの処へ、一人で負って出かけたが、折りよく途中で鹿買いに遇って取引をした、二両二分二朱に売れたと言うていた。

まだいたいけな一二の年に、一六貫余の鹿を負って歩くほどのものだけに、子供の頃から不敵者で、一七の時にははや家を飛び出した、そして山から山を渡り歩くうち、今の家へ見込まれて養子になったそうである。若い頃には獲物を追って、何処とも知らぬ山中に夜を明かしたことは、幾度であったか知れぬ。それでいてさらに疲れることは知らなんだと言う。鳳来寺山麓の門谷の人々は、この男が山中で、一〇〇貫に余る巨大な朽木を負うて歩くのを、ときおり見たと言うた。会って見た感じでは、瘦型のもう六十幾つという年配で、異常な体力を備えているなどとは思えなかった。

一代の間に捕った獲物は、鹿だけでも幾百を数えて、一冬に六二の鹿を捕った年もあったと言う。もう三〇年も前のことで、その頃は獺犬のよいのがいたそうである。タカにテジにフジだと、幾度か犬の名を繰り返して聴かせた。なかでもテジと言う犬は、一冬に九貫目以下ではあったが七つの鹿を捕ったことがあると言う。而して一度手負いにすれば、後はそれらの犬が追いかけて肢を噛み切ったそうである。熊も七つ捕ったと語った。ある時大木の高い洞にいるのを、一人で登って行って、山刀で前肢を叩き切って斃したと言うた。その折りの光景を旅の絵師に描かせたと言うて、粗末な掛軸を出して来て見せてくれた。悪いから黙って何も言わなんだが、功名談とは似もつかぬ、気の毒なほど貧弱な熊と狩人が描いてあった。